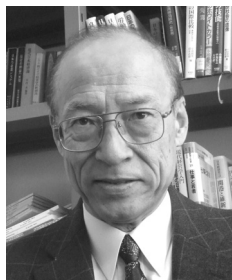


現代のモノづくりと技能の継承



職業能力開発総合大学校
能力開発専門学科 教授

小原哲郎

モノづくり現場の技術と技能

モノづくり現場の技術力の重要な特徴に「総合力」ということがある。工学研究や技術教育の場では、技術は専門化された形で取り上げられる。それと比較するとき、モノづくりの現場における技術の特徴は何といつてもその総合性にある。どのような製品も種類、分野の異なつたたくさんの技術が結集してできあがっているものである。この総合性には様々な意味合いがある。素材から仕上げるに至る一連の基盤技術の総合力、ローテクとハイテクといった新旧技術の総合、デザインや人間工学も加わる総合性等々、そして忘れてはならないのが技術と技能の総合である。

技術が工学に裏付けられているのに対して、技能は人が修練によつて体得した能力であつてそれ自身客観的に表しにくいためであるうか、技能に対する正しい理解と評価は遅れている。自身が熟練した旋盤工であつた作家小関智弘氏は、数値制御の工作機械が普及して間もない頃、熟練技能が不要になつたかと思われている風潮を批判してこついた。

「器用なのが熟練ではない。…熟

練工の特質は、腕の器用さではなくて、仕事を見る眼にある。…何よりも熟練工に要求されるのは、仕掛かり能力、段取り能力とか治具能力とか呼ばれる知的な能力である。」（『鉄を削る』）

そして、数値制御機を情報言語によつて操作する人たちに對して、従来型器機を扱う技能者を「機械言語族」と称した。彼らの「知的な能力」は、通常の言葉や数値を駆使する知性ではなく、機械を言語のごとく用いて考える知性だといふわけである。それを言語と見たところに作家小関氏の面目躍如たるものがある。同様の発想で「道具言語族」を語ることもできるだろう。いうまでもないことだが、情報の時代といわれる現代の生産においても情報が物を加工しているわけではないから、情報言語を駆使する現代の生産者達にもまた機械言語や道具言語を解することが求められている。優れた現代技術も熟練技能が支えてこそ、その性能をフルに発揮することができるのである。

技能の継承

わが国では、技能形成が仕事の中でいわゆるOJT中心で行われてきた

ためかと思われるが、熟練技能に対する理解だけでなく技能の形成過程についても広く理解されているとはいいたい現状がある。

段取りを工夫し問題を解決する力、仕事を見通す力が技能に求められているのだとすれば、技能継承の重要性は疑う余地がないと同時に、また容易なことでもない。技能形成の過程は、「技能の継承」といったいい方とは裏腹に、習得する側の主体的工夫と努力にかかる極めて積極的な能力形成であり創造的な人間形成なのである。だからその優れた指導者達は、自らが手本を示すことによつて課題を与え、決して教えすぎることはない。温かく厳しく見守る。先年他界した法隆寺宮大工西岡常一氏は、「手本を示すだけで、教えないことが大切だ」とまでいつた。

氏がある折に孫弟子達に寄せた書の中に次のような言葉がある。

「親方に授けらるべからず

一意専心親方を乗りこす工夫を切磋琢磨すべし

これ匠道文化の神髄なり」

（『木のいのち木のこころ（人）』）

古来、技能の継承とはこのようなものであつたのだ。